

ジェンダー1

■ジェンダーとは何か？

では、そうなる、ジェンダーというのはなにか？ということなんです。ジェンダーの定義で、「セックスは、身体的性差。ジェンダーは、社会的・文化的性差。」

というのがまあ、一番よく使われている定義です。でも…… 違います。ふふっ（笑）（会場：笑）と、私が言うからには違うんだ（笑）。（会場：笑）

「ジェンダーって男と女のことでしょ」

って思うでしょ？違うんです。これも、ポスト構造主義のジェンダー論のなかで、デルフィーって人が非常にはっきりいっていることで、ほんとに腑に落ちる。理論の力ってのは腑に落ちるってことなんです、

「ははあ、そうだったのか」

と思える。で、それはねえ、まず、ジェンダーとは、「男と女という、二つの“項”を指す言葉ではなく——だから、ジェンダー“ズ”（gender"s"）という複数はない——、ジェンダー化“する”という、一つの行為だ。それは集団に、見えない差異性をつくる」

例えばこのなかで、

「すみません、このなかで、ICUの学生さんでない人、手を挙げてください」

と、言ったとしますね？

「じゃあ出てってください」

と言ったとしますよね？排除がおこなわれているわけです。で、そのとき、ICUの学生さんとそうでない人でサーッ、と線が引かれる。このなかで例えば、

「現役である人と、浪人を経験した人」

とかって言うと、見えない線がさーっちはいる。ジェンダーも同じです。そういう差異化という、一つの行為に与えられた名前がジェンダーだ。ああー、と思いますよね、私がいったんじゃないですよ、デルフィーがいったんです。でもとっても腑に落ちる。で、それは、根拠があるわけじゃなくて、たまたま、という恣意的なものがある。なんでおっぱいがあるかないか、ちんちんがあるかないか、子宮があるかないか、っていうことで、人間の間でそういう分割線がひかれなきゃいけないか、っていうことには、かなり恣意的な理由しかない。しかもそれに、どういう特性、attributeが、あるかは、歴史と文化と社会によっておそろしく多様にあるために、どういう属性の集合が男で、どういう属性の集合が女であるかは、実は、よくわからない、っていうことがわかっています。でしかももう一つ、違っているが対等かということ、ええこれは **different but equal** ということですけど、そのなかには必ず、非対称な、権力関係があるっていうことがわかっています。

ポスト構造主義のジェンダー論学者、ジョアン・スコットっていう人が、これをずばり一言で

「身体的差異に意味を付与する知」

といました。

「私とあんたの間に、おっぱいがあるかないかぐらいしか差がないんだけどそれでもって、なんで私たちの人生ってこんなにわかれなきやいけないの？」

みたいな話、ですよ。実は、よくよく考えてみると、人種・民族・性別も、すべて、このようにして、いわば事後的に、言語によって、意味を付与された、ある恣意的な、身体的差異に他ならない、っていうことが、わかってきてます。したがって最近、人種理論の構築主義、とか、民族理論構築主義、構築主義の民族理論、というようなものが、どんどん登場してきています。

■ジェンダー公正とは何か？

それでは、ジェンダー公正、**gender justice** とはなにか、ということですね。女はなんで意義を申し立てしているのか、なにに文句があるのか、っていうことを考えてみる。

「君たちなんだかずいぶん不満があるみたいだけど、どうしたいわけ？」

って、よく、まあおとこから聞かれるわけですね。

「ああ、そう、ボクたちみたいになりたいわけ？じゃあ、女捨てて、やっといで。」

……という風な考え方があります。

でも、女のほうからは、

「ああそうなの、女を捨てて男の身になることだって？ばっかみたい。」

(鼻で笑いながら) 私なんかねえ、男うらやましいと思ったことないからねえ。男がすることにはロクでもないことが多いので、(会場：笑) やってみたいってあまり思わないんですが。最近ではついに、

「男がすなることを、女もしてみんとてするなり」

の、一つに、過労死、っていうものがでてきました。(会場：笑) ええ、女性過労死、第一号が登場したのが 1991 年のことです。さきほど言ったジェンダーとはなにかというデルフィーの三つの定義からいうと、女が男並になることがジェンダー公正の目的・目標ということはありません。なぜかという、デルフィー氏がこういうことをいってます。

「男であるということは、女よりも優位にあることである。」

非対称な差異化、ですからね。すべての人が優位になれば、自分よりも劣位にたつ存在がいなくなるということ。男であるということができなくなってしまう。すべての者が優位になる、支配者になるという、そのような社会は考えることができない。したがって、ジェンダー公正は、劣位にある者が全員まとめて優位な人間と同じに立つということではあり得ない。これをもっと明確な言葉でいった人がいます。最近ポスト・コロニアル研究の中で、沖縄研究の非常にブライトな、若手の研究者・野村浩也さんという人が、優れた本を書きました。この人が、

「沖縄人にとって、日本人になるとはなにか？日本人は沖縄人に対して誰よりも、抑圧者・差別者である。日本人になるということは、自分もまた抑圧者の仲間に入ることである。とこ

ろで、非抑圧者のいない抑圧者は存在し得ない。すべての人間が抑圧者になるということはありません。だとすれば、沖縄人にとっての解放は、日本人になる、もしくは日本人のようになるということでは、あり得ない。」

私はジェンダー理論の文献を読んでいるのかと思ったくらい驚きました、ブリリアントな文章でした。よくわかるでしょ？

それともう一つですね、

「女がそんなに文句あるんなら、じゃあボクらがしたこと君らもすれば。」というのがある。例えば、

「男が売春する、うらやましい？じゃあ君もやれば？リゾラバってのもあるし」

知ってる？リゾートラバー。岩井志麻子さんがやってるよね。知らないか（笑）。（会場：笑）ベトナムの男を金で買いに行くっていうのだよね？リゾラバ、やってる日本の女性もいます。

「君たちうらやましいならやれば？」

とかね。それからもう一つ、

「家事がいやなんだって？じゃあ、家事の好きな男もどっかにいるから、探して、主夫、**house husband** になってもらえば？人には好きずき・向き不向きがあるんだから」

という言い方がただちに返ってきます。こういう話になると、すぐ男で家事やってます、つてのが寄ってきて、さも立派なことをやっているかのように壇の上で話してもらったりするんですが、変だぜ、つてあたしなんか思うんですね。つまり、非対称な差異化というものをそのままにして、単に項の入れ替えをただけでは、ジェンダー公正とはいえない。従って、よくある誤解のいずれもが、ジェンダー理論の論理的な帰結として、そんなものではありえないと非常に明確にわかります。ほかには、

「ジェンダーなんていらないよ。もうなくしちゃえば？」

つていう言い方をすると、いまジェンダーフリーバッシングつてのがおこなわれているんですが、

「それつて、男も女もない、退屈な世界じゃない？」

つていうのがすぐ返ってくる反応なんですよね。でも、それは性がない世界なのか、と一んでもありません。それは逆に、男と女という、たった二つの差異しかない退屈な世界から、もっと多様な差異のある世界へ、私たちの可能性を広めてくれる、そういう文化のことです。

■ジェンダー研究の成立

こういうことを研究の対象にする、ジェンダー研究というものが成立しました。私はそれをやってるんですが、ジェンダー研究の前身は、女性学でした。そのもとは、婦人問題論だったんですが、これも「婦人・女性・おんな」と関係あるんです。で、どう違うのか。婦人問題論つていうのはね、問題つて書いてありますよね。これは社会問題論の一部でした。私は婦人問題論つていう言葉が嫌いです。婦人問題つてよく見てください。これを、こういうふう

に、ひっくりかえしましょう。そうすると問題婦人、って読みます。私のような女です。(会場：笑) その昔、

「私は、(小指を立てて) これで、首相をやめました。」

って言った人がいます。滋賀県出身の首相さんなんです。で、これ(小指)ってなにか。女性問題のことですね？女性問題でやめました、っていうけど、バカ言え、問題起こしたのはあんただろうが、(親指を立てて) 普通は男性問題っていうんです。(笑)(会場：笑) ですから、婦人問題論が実際なにをやってたかっていうと、問題についての研究をやってたんです。いいですか？売春女性の法制問題、とか、工場労働者の流産問題、とかね。社会病理学の一つ、としてそういうことやっていた。

「でも、待てよ？女が問題抱えているわけじゃなかろうが。社会のほうの問題だらけだから、女が問題を抱え込まされているんでしょうが。」

このように、見方を反転させたのが女性学の誕生でした。実は女性学が生まれたときに、私たちの大先輩の、婦人問題論をやっておられる立派な女性の先生方たちが、眉をひそめられました。「あら、婦人問題論という学問研究の分野があるのに、なんでこんなものをわざわざ新しく作らなきゃいけないの？」

って、思った方たちがたくさんいらした。でも、今のような説明をすれば、婦人問題論と女性学とでは、問題の所在を女から社会にシフトして、社会の見え方が変わったことがわかる。これを、パラダイム転換といいます。パラダイムっていうのは、世の中のものの見方の枠組み、世界の見え方、のことです。で、それがさらにジェンダー研究へとなった。ローカルからユニバーサルへ、ローカルってのは、局地的です。女性学は、女のことを対象に研究をやってきました。

「待てよ、女のことをせせせせと研究やって、なにがわかるのか」という疑問がわいた。

女のこといっぱい研究やっててもね、男性の研究者はこういうんです。

「あっ、そう、ごめんねー、君そこにいたのー、ボクら気がつかなかったー。」

っていうんですね。

「じゃあ君らは君らの世界でちゃんとやってー。ボクらはボクらのことでやるからー、天下国家を論じるのはボクらに任せといて。」

っていう風になるんですね。そうして、女性学ってのはいくら増えても、メインストリームの学問研究の世界を揺るがすにいたりませんでした。こういうのを、ゲッター化、周縁化、っていいです。ジェンダー研究は、それへの批判から登場したものです。

■ジェンダー研究に何ができるか？(図参照)

で、ジェンダー研究になにができるか。社会学者はこういいます。あの、four dimension paradigm っていうのが大好きなんです。ちょっと説明しましょう。まず縦軸が、公的領域と私的領域。横軸が、男(♂)と女(♀)。普通まあこういう風に(♂の矢印を上向きに書く)書いたりするんですけども、私ねえ、これがあんまり好きじゃなくってねえ。こうすると(♂の矢印を下向きに書く)ほら、しょんぼりしててかわいくならないでしょ？(会場：笑)

女性学は女の居場所、女のいるところを研究対象にしてきた。女の居場所は3K、っていわれ
てきました。「きつい・きたない・危険」じゃないですよ。キッチン・キルヘ・キンダーガー
デンのKです。子ども部屋と教会と、家庭。女が私的領域にいる、これを研究対象にしてきた。
学問の世界のなかにもですね、アジェンダ設定、というものがあります。つまりなにが学問研究
として、価値が高く、なにが価値が低い。例えば、女性にとって、とっても関心が高いこと。
ええー、毎月毎月、月のものが女にはくる。

「今月は、くるかしら？どきどき。もし遅れたら？どきどき。思い当たることがあるかしら、ど
きどき。」

女の子にとって毎月毎月、月のものっていうのは本当に大きな関心の対象ですよ。そこで、
例えば、月経のときにどういう月経用具を使っていたか、という疑問が思い浮かぶ。私たちは学
問研究のときに、こう考えます。

「自分が考えつくほどの質問は、自分以前にも、自分以外の誰かが、きっと思いついていたに違
いない。じゃあまずそれを点検してみよう。」

これを先行研究の検討といいます。ところが、じゃあ、日本のおんなはどんな生理用品を使っ
てきたのだろうか、っていうことを調べようと思ったら、先行研究っていうものはありませんで
した。だーれもやってないの。つまり、研究者っていうものはそういうのを歯牙にもかけないの。
理由は二つです。まず学問上、価値のない分野だと思われたから。二つ目に、そういうことに関
心を持つ、生理のある研究者自身が、そもそも研究者集団にいなかった。そうすると、先行研究
がないことを手がけるとどうなるか。あなたが、その分野の、第一人者になれます。すごいわね
え。あの、私が教えてた学生のなかで、アダルトビデオの社会史で卒業論文を書いてきた人がい
ます。10年前のことでした。賢いやつだと思いましたが、日本にアダルトビデオが登場したの
は1970年です、なぜか。ビデオというテクノロジーがそれ以前にはなかった。そうすると、1970
年から、約30年間分の歴史を研究してみようと思ったら、先行研究というものがない。学問研
究の世界ではそんなこと価値がないと思われてきた。だーれもやってない。だーれもやってない
ことをやってきたら、あんたがパイオニアで、あんたが第一人者だよ、っていうことになるわけ
ですね。で、彼はほんとう一に、好きでした。(会場：笑)何百時間見てるか、これを耐久時
間っていうんですけどね、やっぱり人間好きこそものの上手なれです、(会場：笑)好きなこと
を研究の対象にしないとだめだということがよくわかりました。(会場：笑)

女性学ってのは、初期のものは女の居場所にいる女の研究をやってきたわけですが、でもちょ
っと待てよ？女の居場所は私的領域だけじゃあるめえ。女は、公的領域、政治にも経済にも社会
にも女がいる。そうすると公的領域の女についての研究は、当然うまれます。女性労働問題、そ
れから女性と政治、女性と市民社会のような研究領域がうまれます。女性学はこの二つをやっ
てきました。で、おおい待てよ、男性学はあのかよう、というと、はい、ありますよっていうの
がここ(第4象限)。男性学は、男はいつ、男になるかを問う。でも男はだいたい自分のことは
あんまり男だと思って行動してない。

「あ、ボクちゃん男だったのー。」

というときには、男ってというのは、女に直面したときに、あんたはオスだ、あんたは男だ、という風に対面させられる。男が男になるときは、私的領域で、女とさして向かい合ったときだっというので、男性学が対象にしたのは、まず第一に、家庭にいるときの男でした。父や、夫としての男でした。これもまた、ほとんど学問研究のなかでは、研究テーマとして重要視されてこなかったということがわかります。

アジェンダ設定では、学問研究のトップにくるのは、天下国家とか、哲学とか、権力とかですね。そういうことやるのが一番価値のあることで、私的な世界ってというのは価値がない。だから、研究ってのは意味がないって思われてきたわけです。ですから、男の下半身を対象にすると、好事家、

「あんたも好き者やなあ。」

と言われるような、そういう風に見られてきたわけですね。男性の研究者もまた差別を受けてきたわけです。男の下半身、別名私たちはそれをセクシュアリティと呼んでいますが、そのセクシュアリティ研究、例えば、ゲイ・スタディーズとか、男性の性欲についての研究が、ここでうまれました。

で、まてよ、最後に残ったここ（第1象限）はどうなんだ、ここは手つかずだ。ここは、中立の公的な領域で、男も女も、ジェンダーを捨てて、性別を捨てては行ってこいということなのかどうかというと、ここに、女がいない、不思議な世界がありました。

■ジェンダー研究に何ができるか？(2)

「ジェンダー研究になにができるか」というのが今日のテーマですが、女がいれば女がいる領域を、女がいなければなぜそこに女がいないかを、構造的組織的に説明する理論っていうものが、ジェンダー研究というものです。したがって、申しときますが、この、1から4の象限のうちで、ジェンダー研究にできない領域は一つもありません。ここでいう構造的に女がいない領域は、政・財・官・軍、とくに軍隊ですね。大体この人たちは、

「男子一生の仕事」

とか、それから選挙のとき、

「小泉純一郎一、おとこにしてくださいー」

とかっていいますよね。(会場：笑) なんなんだろあれ、ね。(会場：笑) まあ男じゃなきゃできないのかっていう話になるんですが、じゃなぜこの領域に女がいないか。

「女がは行ってこねえからだよー、はいりたかったらはいってこいよー、女捨ててかかってこい。」

っていう、風な言い分があります。もちろん最近は何、企業のなかにも女性は多いですが、一部上場従業員500人以上の日本の大企業で、女性が社長の企業はなんと一社もありません。政界には女性は増えてきました。次の首相は野田聖子か、田中眞紀子か、とか言われてきているけど、私には関係ないけど。(会場：笑) まあいいけど、こういう領域に女性がいるようになった

のは、ごく最近のことです。そこにどういうルールがあったかっていうとですね、日本には、日本型経営の三原則というものがありました。それは、さくっと説明するとこの3点セットです。終身雇用、年功序列給与体系、そして企業内組合。ここには、ジェンダーのジェの字も、書いてありません。でも、気がつけば、重役にも、役員にも、課長にも女はいなかった。なぜか。

「だって女は、辞めちゃうんだもん。」

って言われてきたわけだけど、嘘ですよ。本当はね、辞めない女だってね、昇進させてもらえなかっただけなんだから。でも考えてみたら、この日本型経営の三原則というこのルールそれ自体、10年20年30年経ってみれば、フルタイム雇用を、家庭責任を持たずに、後顧の憂いなく、あたかもシングルであるかのように、働き続けてきた男だけが、居残るような仕組みだった。従ってそのプロセスのあいだで、構造的・組織的な、女性の排除がおこなわれてきたことが結果としてわかり、私たちはこういうルールを、ジェンダーバイアスのあるルール、と呼びます。

では、これを変えるにはどうすればいいか。性差別禁止、なんていう必要はない。やめたらいいんですこれ。すごく簡単です。新卒一括採用をやめる。採用の年齢制限をやめる。年齢差別の禁止をする。誰でも、何歳からでも、いつでも新しくスタートラインに立てるような組織と労務管理・雇用管理ができれば、結果として、女性の比率が増えます。ルールってそういうもんなんです。ですから、これまで日本の社会っていうのは、一見ジェンダー中立に見えるようなルールが「オヤジ」に都合良く機能してきた、っていうものの集合なんですね。

そうするとジェンダー研究、いま私が、日本型経営の三原則のジェンダー批判をやりました。これもまたジェンダー研究の一つです。日本の企業というものは、どのようにジェンダー的な性格をもってるのかっていうことを研究するのは、ジェンダー研究の非常に重要な、研究手段の一つになります。